

## 神様の目を持って

丸山 勉

### 【聖書】創世記 45 章 1～15 節

ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。

ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。そして、ゴシエンの地域に住んでください。そうすればあなたも、息子も孫も、羊や牛の群れも、そのほかすべてのものも、わたしの近くで暮らすことができます。そこでのお世話は、わたしがお引き受けいたします。まだ五年間は飢饉が続くのですから、父上も家族も、そのほかすべてのものも、困ることのないようになさなければいけません。』さあ、お兄さんたちも、弟のベニヤミンも、自分の目で見てください。ほかならぬわたしがあなたたちに言っているのです。エジプトでわたしが受けているすべての栄誉と、あなたたちが見たすべてのことを父上に話してください。そして、急いで父上をここへ連れて来てください。」

ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。

### 【序】「ヨセフ物語」は、リアルな物語

先月からご一緒に味わってきました創世記の「ヨセフ物語」ですが、今日はそのクライマックスとも言うべき 45 章から聞いてゆきたいと思います。

幼い時から教会に通っている方にとってはもちろんでしょうし、そうではない方にも、この「ヨセフ物語」は親しみやすく、スーッと入ってくる話だと言えるかもしれません。まるで大河ドラマのような、山あり谷ありのストーリーでもありますから、映像が浮かんでくるような感じがしますよね。けれども、私は改めて読んでいて、この物語というのは単なる昔話でも、ましてやお伽噺でもない、今の私たちにも深く語りかける、とてもリアルな物語だなあ、と思わされました。

それは、一つの見方をするとするならば、私たちの人生の「傷からの回復」(癒し)という視点がこの物語にはあると思います。

### [1] ヨセフと兄弟たちの「和解」

今日の箇所は、正に今エジプトの宰相になって目の前にいる自分こそが、あなた方兄たちの弟のヨセフであることを明かしたことから始まる、兄弟たちとの「和解」が描かれている箇所です。とても心を動かされます。兄たちも、目の前にいる人物があつたヨセフだと知り、言葉を失っています。しかし、このヨセフは**今、声をあげて泣いている**のです。これまで、弟のベミヤミンの姿を見て、その懐かしさと愛おしさに、人目をはばかりて隠れて泣いた、という描写は43章にありましたけれども、今はもうヨセフは隠れることなく、堰を切ったように涙を流しています。「涙」は正直だと思います。それは、心が溢れた時、自制や理性を超えて、自ずと流れるものですよね。それはある種の「解放」の経験だと言えるのではないかと思います。

私たちは今日の箇所を読んで、その“ハッピーエンド”とも言える物語の終結に、ホッと胸をなでおろします。「ああ、よかった。ヨセフも兄弟たち本当に良かった！」と思います。けれども、これは本当に、“神様の憐れみ”以外の何ものでもないことを思うのです。なぜならば、そのような結末にはならない、恐らくは、お互い生き別れたまま、心に「しこり」や「傷」を抱えたまま生き続ける可能性の方がずっと大きかったわけですから。

この家族の、これまでの悲劇というものは、冷静に見ると、父ヤコブの、ヨセフへの依怙贖(偏愛)から始まっています。自分が最も愛する妻ラケルの最初の子どもだったからです。着る服もこの子には晴れ着を着せ、他の兄たちとは区別(差別)していたので、兄たちが面白くないのも当然です。しかもこのヨセフは夢の中で、兄や父親が自分に頭を下げていた、というようなことを無邪気にも話をしたのです。兄たちからすれば「ふざけるな」ということだったでしょう。兄たちは結局このヨセフを、野原で見捨ててしまうのです。兄たちが気付かぬ内にヨセフはエジプトに売られてしまうのですが、兄たちとの関係はそれっきりになってしまいました。父親ヤコブには、ヨセフは獣に噛み殺されてしまったように偽りの工作をします。父親も悲しみましたが、兄弟揃って父を偽り続けるというのも苦しいこと

だったと思います。そしてヨセフです。異国で生きなければならなくなった彼の苦悩、兄たちに見捨てられた苦しみ、愛する父のもとから離れて生きる孤独と悲しみは、絶えず襲って来たのではないのでしょうか。つまり、この家族は、「崩壊」していたのです。その家族が、長い年月の中（20 数年の時が経っています）、人間の計画や思いを超えた展開の中で、「再会」また「和解」へと導かれているのです。

## [2] 「お芝居」の終わり

この「ヨセフ物語」は、色々な側面から見る事が出来ると思いますが、ヨセフを理想の人間のように神格化して捉えてしまうというのは良くないのではないかと思います。彼も一人の「人間」なのです。

私は今回改めて思ったのですが、「ヨセフ物語」には、極めて人間的な、作られた「お芝居」が幾つも出てくるということです。

初めは、父を騙すために兄たちがヨセフの着物に獣の血を塗って、ヨセフが死んだことにする芝居があります。更には、世界的な飢饉がやって来た時に、兄たちは知らずしてエジプトの宰相となったヨセフと対面するのですが、そこでヨセフは、兄たちであることに気づきながら芝居を打ちますよね。「お前たちがこの国の手薄な所を探るスパイでないならば、一番末の弟を連れて来い」と言います。そして、やがてその弟**ベニヤミン**もやって来て、食料を積んで帰る時、ヨセフは、彼の荷物にそっと**銀の杯**を忍ばせます。盗んだことにし、その償いのためにベニヤミンは残るようにと兄に言うのです。ヨセフのしたたかさ、その思惑を見る思いがします。心の深い所では再会を喜んでいたに違いないと思いますけれども、彼はきっと、自分の中にある「許したくても許せない心」と戦っていたのだと思うのです。

その心を打ち破ったのは、**兄ユダの言葉**でした。44 章 33～34 です。

「何とぞ、この子の代わりに、この僕を御主君の奴隷としてここに残し、この子はほかの兄弟たちと一緒に帰らせてください。この子を一緒に連れずに、どうしてわたしは父のもとへ帰ることができましょう。父に襲いかかる苦悶を見るに忍びません。」

兄ユダも、ずっと苦しんできたのです。弟ヨセフを失わせ、父ヤコブを悲しませてしまった負い目をずっと持っていたことでしょう。ですからこの上、ヤコブが可愛がっている末っ子ベニヤミンをも失うということは絶対避けなければならない。そのためには**自分が犠牲になる、私を奴隷としてくれ**、とヨセフに嘆願するのです。ここでヨセフは、カナンで生きてきたこの家族の営みが心に迫って来たのではないのでしょうか。そして今は、生きていく困難に直面し、エジプトまでやって来て私に食料を懇願している。私もまた実は同じ父の家族、その一員ではないか！ という原点、原風景を見せられたのではないのでしょうか。20 数年間かかり、今、兄が変えら

れ、またヨセフの心の中の固い塊も、氷が解ける様に溶けていったのだと思います。

今日の45章の初めにはこうありました。

「ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。」—ここに「お芝居のおわり」が鮮やかに示されているように思います。もう自分で自分の心を抑制しなくてもよい。ヨセフは自由にされた。それが涙となって流れました。彼は声をあげて泣くことが出来たのです。

### [3] 私たちの「喪失体験」と癒し

私は先日、会社で、あるクリスチャンの臨床心理士のインタビューに立ち会う機会がありました。そのお話の中でとても教えられたことがあります。この方は女性で、いわゆる「グリーフ・ケア」（悲しみや心の傷の癒し）の働きもされています。この方は、私たちは誰もが「喪失体験」を抱えていると言われました。例えばそれは、家族の死という体験があります。それは比較的他の人にも認知されやすい悲しみの体験ですが、私の中だけの喪失体験もあります。愛するペットの死とか、若い時と今の自分とのギャップで苦しむとか、健康不安とか、いじめの経験とか、誰かとの信頼を失ってしまうこととか、そういう様々な、他者と分ち合えない様な「喪失体験」や「悲嘆」の経験を私たちは抱えているのだと仰るのです。

それは普段の生活の中では隠されているのだけれど、深い所で、「失った傷」、「悲しみの傷」として、自分がどこかで抱えているものなのですね。時折思い出して悲しみが深くなる時もある。そして、その方は仰るんですけども、「辛い時、心理学を用いてのカウンセリングで、それはある程度生きやすくなります。けれども心理学で捉えきれないもの、着地し切れないものがどうしてもある。私自身は、着地点は神様にしかないと思います。人間の生きる中での“幸・不幸”というものを超えた着地点は、神様という方は私を決して諦めない、私自身を愛しているということだと思う」と仰っておられました。本当にそうなのではないでしょうか！

私は、この創世記45章のヨセフが語った言葉に驚いたのですけれども、彼は自分のことを語る時に、自分を主人公にしては語っておりません。4節以下を見ますと、こうあります。

「ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もな

いでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」

今ヨセフは、自分の「目」で兄弟たちと対面していますけれども、その「目」というものは、「**神様のまなざし**」なのではないでしょうか？“神がかかる”という意味ではありません。そうではなく、こんな罪深い私をも神様は諦めないで、今兄弟たち・家族たちの危機を救うために用いておられるという事実。そうだ、すべては神様のわざなのだ！私はこの神様に導かれるその僕に過ぎないのだ。何と有難いことか！と思ったと思います。これは、ヨセフ自身の癒しでもあったと思います。その「神様の目」というフィルターを通して、隣人を見る、世界を見る。そこには、自分自身にこだわる心から解放される道、赦しの道が開かれている。そのことをこの物語は教えてくれているように思えてなりません。(最後の 50 章も！)

#### [結] キリストの打たれた傷によって

先ほどのクリスチャンの臨床心理士の方は、実はこのようなことも言っておられました。「真の癒しというものは人には出来ません。大切なのは、聖霊の助けを頂きながら、私自身もその方と一緒に神の形に回復されていくことです。いつも帰っていく聖書の言葉は、**私たちはイエス様の打たれた傷によって癒されていく、という第一ペトロ 2 章 24 節の御言葉です**」と語られました。

イエス様が私たち一人ひとりを愛し、愛し抜かれて、自分では気が付かない深い罪の性質を、ご自分が十字架で、私に代わって負って下さったことによって、私たちは神様との交わりの中に回復されたのです。私たちが願う前にです！

この**神様の人知を超えた愛**を頂き、**その愛に貫かれている私たち自身**であることに目が開かれる時、私たちの世界と隣人を見るまなざしも、**神様の愛の視点**を頂けるものへと私たちを導いて下さることを信じて参りましょう。それは、**私自身という存在の新しい発見**でもあります。もう「お芝居」はする必要はありません。ヨセフ自身を、また、その家族を導き、変えて下さったお方は、同じように私たちにして下さるはずです。神様は生きておられますから！

お祈りを致します。